



## 2007年度の活動記録

### シンポジウム『平和研究とNGOの連携、その可能性』(2007年10月31日)

平和・コミュニティ研究機構は、2007年10月31日、太刀川記念館3階多目的ホールにおいて、「平和研究とNGOの連携、その可能性」をテーマにシンポジウムを開催した。コミュニティを鍵概念とする平コミの研究活動にとって、実際に様々なレベル、分野、地域で活動するNGOとの連携は不可欠であり、今回のシンポジウムはこの方向に向かっての具体的な第一歩と位置づけられた。



シンポジウムは2部で構成され、第1部はアジアで最も進んだ人権・平和に関する大学院教育を実践しているタイ・マヒドン大学大学院人権・社会開発学部講師のシーブラーパー・ベッチャラミーシーさんが報告された。教育にとって実践がなによりも重要であるという観点から、教育の内容においてもNGOと連携し、NGOメンバーを講師に招き、また学生の60~70%がNGOとの関わりを持っている。教育プログラムの作成にも要所にNGOメンバーが配置されており、フィールド・スタディの組織化を依頼している。また、NGOから研究を委託されている案件もある。しかし、コミュニケーションの不足や大学の制度が障害になっているなどの問題もある。

第1部のもう1人の講師、聖公会大学NGO大学院のバク・キョンテ教授は、民主化の過程で各種の運動団体が増加し、大学との橋渡しとしてNGO大学院を開設したことを報告された。政治的民主化から社会的民主化へと民主化を深めている韓国において、大学とNGOとの連携は広がっており、他大学でもNGO大学院は増加している。聖公会大学は民主化運動の資料館を保有しており、サイバーNGO資料館を設け、公務員にたいして人権教育を行うなど活発な活動を展開している。このような展開において、韓国1国のみならずという視野から脱してアジアとの連携へ向かうべきだという意見が強くなり、多方面から募金を集めて、アジアのNGOメンバーを留学生として招聘することにした。こうしてアジア9カ国から1名ずつ、韓国から2名のメンバーが組織され1年間のプログラムが始まった。自分たちは「国境を越えて繋がっている」と感じたメンバーが思わず涙を流す場面もあったという。

第2部では日本の代表的なNGOの論客を招いて、上記のお2人とともにパネルディスカッションをおこなった。吉岡達也氏(ピースポート共同代表) ... おなじ平和教育でも大学とNGOとでは「言語」がことなる、ピースポートへの参加は大学の単位にはならない、などの問題がある。今日の会議はこうした問題の解決へのステップとして重要である。寺中誠氏(アムネスティ・インターナショナル日本事務局長) ... NGOは活動が実践的であるが、交渉の場面で根拠となる情報、論理、分析に弱さがある。NGOは社会的な認知が乏しいのに対して大学は認知されている。制度的に組み込み、協働を見せていくことが必要。高橋清貴氏(JVC専門調査員、恵泉女学園大学特任教授) ... 批判的の市民をどう作るかがスタートポイントである。「連携」が言われることが新しい。大学とNGOとはパートナーなのだろうかライバルなのだろうか。

コメンテーターの伊藤道雄・立教大学21世紀社会デザイン研究科教授... 民主化や学生運動が過去のものになるとNGOは運動ではなく就職先と見なされるようになる。そしてNGOの力が弱まっていることが気にかかる。おなじく田中治彦・立教大学文学部教授... 大学のカリキュラムにNGOが入ってくるということは、NGOが提案する時代は終わることを意味している。NGOにとってのメリットがないのではないか。

シーブラーパーさんとバク教授からは、NGOと大学を仲介するオルタナティブな大学の構想が述べられるなど、全体的に意欲的なセッションであった。(五十嵐暁郎、本研究機構代表・立教大学法学部教授)



### 『平和・コミュニティ叢書』刊行のお知らせ

#### 第2巻『平和とコミュニティ 平和研究のフロンティア』

- 宮島喬「『平和とコミュニティ』を問う今日的文脈」
  - 佐々木寛「『平和』と『コミュニティ』」
  - 小川有美「グローバル化と価値・規範コミュニティ」
  - 五十嵐暁郎「ローカル・コミュニティと平和・安全保障構想」
  - 松本康「現代コミュニティ論」
  - 佐野麻由子「ジェンダーの視点からみた平和の構築」
  - 宮島喬「人の移動と平和」
  - 佐久間孝正「多文化共生コミュニティとは何か」
  - 湯澤直美「親密圏における女性への暴力と平和」
- (明石書房、税別2500円)



#### 第3巻『移動するアジア 経済・開発・文化・ジェンダー』

- 林倬史「東アジアのトランスナショナル・コミュニティと知識共創のメカニズム」
  - 郭洋春「グローバル化する東アジア経済と市民連帯」
  - 内野好郎「アジア通貨危機と資本移動」
  - マーク・E・カプリオ「在日朝鮮人と帰還問題」
  - 坪谷美欧子「『永続的ソジョナー』という生き方」
  - 小ヶ谷千穂「移住労働者とホスト社会が切り結ぶ『市民社会』」
  - 栗田和明「タンザニア人交易人のタイでの活動」
  - 佐久間孝正「イギリスの南アジアのコミュニティ」
  - 田中治彦「北タイにおけるNGO活動の歴史的展開」
  - 大橋健一「現代都市とローカル・エスニック・コミュニティの動態」
- (明石書房、税別2800円)

**連続セミナー**

**平和・コミュニティ研究機構叢書合評会**

**『移動するアジア 経済・開発・文化ジェンダー』**

第1回(12月3日) 第2回(12月17日)

叢書第3巻『移動するアジア 経済・文化・ジェンダー』の合評会では、叢書掲載の中の7本の論文を取り扱った。当日は、コメンテーターとして広田康生氏(専修大学文学部教授)と福島清彦氏(立教大学経済学部教授)をお招きし、有益なコメントを頂いた。さらにフロアとも活発な議論が交わされた。広田氏からは、さらに合評会での議論を踏まえて論評を頂いた。以下、広田氏の論評を紹介する。

本書を構成する諸論文は、アジアにおける経済、政治、社会、文化それぞれの領域におけるトランスナショナル・コミュニティ形成の現実と可能性を実証的に探求している。本書を貫くモチーフは、画一化・均一化のグローバル化とは異なる、個別の経験を連ねてトランスナショナルな仕組みを形成する可能性についてである。それぞれの主張に触れたい。



林論文は、研究者、技術者の国際移動に焦点を当て、米国によるテクノヘゲモニーの時代の終焉と科学技術生産の分業化に基づく、アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティ形成の経済的基盤に言及したものである。郭論文は、アメリカ主導のグローバル化とは異なる、多様な価値の尊重を軸とするアジア型の「多層・多次元」なトランスナショナル・コミュニティ形成の鍵を、人々による「エクスポージャー」=「人々の生の状況に触れる旅」を連ねることのうちにしようとする。内野論文は、マレーシアとインドネシアの事例から、政治経済問題と民族、社会問題領域とが切り離せずに繋がるアジア特有のトランスナショナル・コミュニティ形成の問題を指摘する。カブリオ論文は、第二次大戦後の在日朝鮮人の帰還問題の歴史に照準するが、この問題が決して過去の問題ではなく、トランスローカルな経験を共有し理解することの厳しさを我々に問うている。佐久間論文は、イギリス・サウソールのシクに焦点を当て、トランスナショナルな人々の実践と活動が、時に血の滲むような、自文化の問い直し実践を要求することを指摘し、経験の共有や普遍的な価値の共有がいかに重要でかつ困難な道であるかを改めて読者に自戒させる。田中論文は、タイのNGO活動の展開に触れながら、それぞれの経験や価値の蓄積の実践を指摘し、その具体的な道筋を探ろうとしている。大橋論文は、神戸のチャイナタウンに焦点を当て、エスニックな街づくり実践のなかに、資本の論理をしたたかに取り込んで、ローカル・イニシアチブを実践する姿を指摘し本書のまとめとしている。

全体をとおして本書は、グローバル化の中でアジアの人々がいかに躍動的にトランスナショナルな世界を形成しつつあるか、その可能性と現実を真摯に見つめようとしている。合評会で佐久間は「同化なき統合」の問題に触れているが、異質多様の極みでもあるアジアにおけるトランスナショナルな世界の形成においてもこの問題が鍵をなすように思われた。それは筆者にとっても今後の課題である。(広田康生)

全体をとおして本書は、グローバル化の中でアジアの人々がいかに躍動的にトランスナショナルな世界を形成しつつあるか、その可能性と現実を真摯に見つめようとしている。合評会で佐久間は「同化なき統合」の問題に触れているが、異質多様の極みでもあるアジアにおけるトランスナショナルな世界の形成においてもこの問題が鍵をなすように思われた。それは筆者にとっても今後の課題である。(広田康生)



**『平和とコミュニティ 平和研究のフロンティア』**

第1回(1月11日)

叢書第2巻『平和とコミュニティ - 平和研究のフロンティア』の第1回合評会は、編者の一人である五十嵐暁郎代表の司会で本書第2部の4本の論文を取り上げた。当日は全体を2部構成とし、コメンテーターとして勝俣誠氏(明治学院大学国際学部教授)と小ヶ谷千穂氏(横浜国立大学教育人間科学部准教授)をお招きした。



前半では、佐野麻由子氏「ジェンダーの視点からみた平和の構築」と湯澤直美氏「親密圏における女性への暴力と平和」に対して小ヶ谷氏よりコメントをいただいた。ジェンダーの視点からみる平和と暴力の構造に関する理論的な考察から、日本、韓国、台湾などにおける女性への暴力のあり方が報告され、暴力に対しいかに「介入」できるのかといった具体的な方策の模索にまで至る議論が展開された。

後半では、宮島喬氏「人の移動と平和」と佐久間孝正氏「多文化共生コミュニティとは何か」を取り上げた。勝俣氏から、「平和」と「コミュニティ」という語をどのように捉え、「国家」や「地域」などいかにに関わり合うのかといったコメントをいただき、編者、執筆者、来場者を巻き込む全体的な議論が展開された。暴力を阻止するための力としてどのようにコミュニティを育てることができるのかという本書の目指そうとする新しい学問分野としての「平和研究」に対する刺激的な展望が語られた。

(佐藤誠、本研究機構リサーチアシスタント

・立教大学文学研究科博士後期課程)

第2回(1月30日)

叢書第2巻の第2回の合評会は、編者のひとりである宮島喬氏を司会に、コメンテーターに高原孝生氏(明治学院大学国際学部教授)、高原明生氏(東京大学法学部教授)をお招きした。佐々木寛(新潟国際情報大学文化学部助教授)、小川有美、五十嵐暁郎、松本康(以上、本学教授)各氏の論文を取り上げ、グローバル化に伴う個人化やさまざまな危機に直面する今日において、「コミュニティを通じた平和構築」をひとつの可能性として議論を行った。



必然的に「コミュニティ」には国家や企業など従来の社会的アクターにない効果が期待されることになるので、とりわけ課題となったのはコミュニティの定義であった。その際検討されるのがコミュニティの主体や機能といった側面である。また、コミュニティ自体に内包される権力構造や暴力性、コミュニティ相互の調和達成などに問題が存在し、コミュニティそのものが平和とオーバーラップすることへの危惧も述べられた。利害関係を利用しながらも、暴力的ではない働きかけを可能とする、いまや外部に生身のまま曝される諸個人のセイフティネットとなる共同体への模索が続けられることとなるだろう。なお、今回の合評会には多くの方のご参加をいただいた。「コミュニティ」へかけられた期待の高さをうかがわせるものである。

(宮崎友子、本機構リサーチアシスタント

・立教大学社会学研究科博士後期課程)

## フォーラム

第1回(2007年12月6日)

報告者: 小山田基香氏

(立教大学大学院社会学研究科博士後期課程)

### 「東京のインド人コミュニティの実態と子どもの就学」

本報告では、近年の急速な政府・経済界における日印の交流により、2000年以降急増した、日本におけるインド人IT技術者の増加の背景を説明した後、都内最大のインド人コミュニティである江戸川区西葛西を取り上げ、集住のきっかけ、コミュニティの機能、女性たちの生活世界などの現状について、フィールドワークを基に説明した。さらに、近年江戸川区のインド人居住者が1000人を超え、コミュニティ内の階層化の傾向があることも指摘した。日本の外国人政策の研究という視点から、本報告はインド人急増の背景には2、3年で稼いで帰ろうと思っていた当初の循環型移民としてのインド人側の戦略と、長期間滞在して欲しくないという日本政府側の戦略が一致していたこと、つまりインド人技術者と日本の政策が微妙な均衡のもとに成り立っていたことを解明した。だがインド人の増加に伴い長期滞在者も増加し、日本の地域社会との軋轢も出てきている。そのような中で「インド人学校」が日本地域社会に与えている影響についても考察した。(小山田基香)



第2回(2008年1月16日)

報告者: 須永和博氏

(立教大学観光学部プログラムコーディネーター)

### 「生成するコミュニティ タイ北部山地カレン社会における コミュニティ・ベース・ツーリズム」

国家や資本による大規模な観光開発が、自然環境やホスト社会の生活文化に大きなインパクトを与えてきたことの反省の上になつて、地域コミュニティが主体的に観光開発に関与していくことで、自然環境の保全とコミュニティ開発を両立させようという、コミュニティ・ベース・エコツーリズム(CBET)と呼ばれる観光実践が、多くの地域で広まってきている。しかし、従来の観光研究においては、観光の受け



皿としてのコミュニティという概念については、なかば自明のものとして扱われ、コミュニティの状況依存性や歴史性、あるいはより大きな外部システムとの節合という問題は、等閑視されてきた。

本発表は、以上のような反省の上になつて、タイ北部山地カレン社会を事例に、CBETに参加する「コミュニティ」の動態に接近することを目的としている。そのなかでは、コミュニティの成員がエコツーリズム開発に参加する過程で、外部の行為者や言説、知識との折衝を通じて新たな社会的アイデンティティを形成し、コミュニティ内部で新たな社会性が再構成されていく過程について、近年の文化人類学のなかで積極的に論じられている「実践コミュニティ」という概念を参照枠としながら、明らかにする。(須永和博)

## セミナー

第2回(2008年1月8日)

講師: 中澤秀雄氏

(千葉大学文学部准教授)

### 「『住民投票運動とローカルレジーム』をめぐって」

新潟県巻町(当時)の原発計画をめぐる住民投票運動に焦点を当て、原発誘致政策を推進してきた同県柏崎市と比較しながら、ローカルレジームという観点から地域政治過程を分析した。主要なテーマは、なぜ柏崎市と巻町では対照的な帰結を生んだのか、巻町は原発を拒否したにもかかわらず、なぜその後、内発的發展に向かわずに新潟市への合併を選択したのか、である。また、両市における政治過程を記述するために、ローカルレジームという概念を用い、名望家レジーム、開発レジーム、原発レジーム、内発的發展レジームという4段階を設定した。柏崎市が早い段階で名望家レジームから開発レジーム、原発レジームへと進んだのに対して、巻町ではさまざまな事情からかなり後



の時期まで名望家レジームを残していた。そこから原発レジームに跳躍しようとしたことがかえって住民投票運動による原発拒否という劇的な帰結を生んだ。しかしながら、合併問題については

十分な議論もなく、簡単に新潟市への合併の道を選ぶことになった。これは凶人のジレンマ状況におかれた小さな町の悲劇ともいえる。刺激に富んだ高水準の議論が交わされ、コミュニティ研究にとって大きな示唆が得られた。また、今回はグローバル都市研究所との共催による取り組みであった。

(松本康、本研究機構運営委員・立教大学社会学部教授)

第3回(2008年1月10日)

講師: 一ノ瀬佳也氏

(千葉大学人文社会科学部研究科COEフェロー)

### 「市場思想と平和 『経済学の生誕』を振り返る」

近年では、新自由主義が隆盛しており、「国家」より「市場」に注目が集まっている。この新自由主義においては、「市場」の予定調和が唱えられ、市場ルールの普遍化が行なわれるようになる。その際、「市場」が開放されてないところには、「国家」の力を用いても市場ルールを適用することが行なわれる。ここに様々な文化的な摩擦が生じ、戦争やテロの要因が見出される。「市場」とは、一見すると武力を用いない平和なものに見えるが、戦争をもたらすまでの権力的な作用を伴うものであることに注意しなければならない。こうした課題は、経済学の創始者であるアダム・スミスにまで遡れる。

スミスの理論においては、新自由主義のように個人の利益を増大させるだけでなく、「共感」の道德によって中庸としての共同性を形成し続けることが論じられていた。特に、文明社会では、分業によって富裕を増すに伴い、不平等がもたらされるようになる。この不平等こそが「市民政府」の権威の基盤となるため、その格差を実践的に緩和していくことが求められていた。内田義彦に指摘されたように、スミスの経済学は、当時における戦争を導いた本来的重商主義の独占を批判し、「商業の平和」を志向するものであったのである。(一ノ瀬佳也)



本研究機構は引き続き各種催しを開いて参ります。開催が決まり次第ホームページにてお知らせいたします。参加ご希望の方は本研究機構事務局までご連絡下さい。(火~金曜日、10~17時)

## 大学院平和・コミュニティ研究機構科目授業紹介

平和・コミュニティ研究機構では、研究の裾野を広げるべく、大学院に科目を設置しております。平和・コミュニティ研究機構科目を6単位以上修得した学生は、「専門教育プログラム修了生」に認定し、修了証を発行しております。今回は開講されている10科目のうち4科目を受講生に紹介していただきました。

### 「平和論の政治学」(担当：五十嵐暁郎教授)

「平和論の政治学」では、受講者全員が毎週同じ本の同じ章を読み、



各自のコメントを共有することによって授業が進みます。今期はウルリッヒ・ベック著の「世界リスク社会論」と、平和・コミュニティ叢書1「東アジア安全保障の新展開」を扱いました。毎回全員がコメント

を発表するので、先生や特定の発表者の意見だけでなく受講者全員の意見を聞くことができ、視野が広がります。担当教授の五十嵐先生は、毎回一人ひとりのコメントに対して、様々なコメントや考え方を話してください。それは先生が学生時代に通った名曲喫茶の話からアメリカ大統領選挙や現代の日本の政治についてまで本当に幅が広く、毎回驚かされます。読んでいる本は難しいと感じる部分もありますが、授業は先生の人柄もあって、真面目だけれどほんわかした笑いもありの授業となっています。私自身は政治学を学んだことが今までに無かったのですが、先生の分かりやすい説明と毎回コメントで分からない部分を共有し解決することが出来るおかげで楽しく授業を受けることができています。

(小西和香、立教大学21世紀社会デザイン研究科博士前期課程)

### 「ジェンダーと平和研究」(担当：徐阿貴講師)

「ジェンダーと平和研究」では、近代国民国家が家長長制と結合しながら成立しているという認識に立ち、ジェンダーやセクシュアリティなどの概念を用いることで、その存立構造を批判的に読み解くことを授業の目的にしています。

授業は、主に文献を講読し、その文献に関して先生と受講者でディスカッションを行う形式をとっています。2007年度は、「ナショナリズムがいかにジェンダー・セクシュアリティの再生産と係わっているか」について異性愛主義に関する尖鋭的な論文を読むことを前期の課題とし、それを踏まえ、後期に、第三世界や国内のマイノリティ女性からの西欧フェミニズムに対する批判論文を読むことで「他者を表象することの暴力性」を検討しました。使用した文献は、様々な著書で引用されるような著名なものと、たとえばエジプトのフェミニストの著作など、日本ではあまり知られていないものもあり、両者を並行して読むことができました。また、後期には、第三世界女性の現状をより具体的に把握するため、女子割礼の問題をテーマにした映画の觀賞

も行いました。

国民国家やナショナリズム研究とジェンダー研究の接合した、先端領域に触れることのできる授業です。

(多田はるみ、立教大学社会学研究科博士前期課程)

### 「人の国際移動と多文化共生(担当：大橋健一教授)」

この授業では、都市民族観光論の可能性というテーマを基軸として、都市とコミュニティの関係性について理解を深めます。このテーマは政治・経済・文化など、様々な要素を内包する大きな問題です。

授業の形態はエスニック・ツーリズムに関する文献を題材として、参加者が議論します。今年は少人数でありながら、様々な専門領域を背景とする院生が集まりました。したがって、多角的な視点で我々の周りで起こっている現象を考える事ができました。文献の内容も、日本の都市を題材としたものや、海外の観光地を題材としたものなど様々であり、もちろん英文献も豊富です。

教室での議論では、文献からの情報のみならず、参加者の観光地での体験も柔軟に組み込める和やかな雰囲気です。さらに池袋という地勢を活かし、その街並みと営みを実際に観察し、現実を見過ごす事なく研究を行います。

都市社会・民族集団・観光現象、どれか1つでも興味を持つテーマがあれば、そこからさらに世界を広げる事が、この授業で期待できることでしょう。

(高木知之、立教大学社会学研究科博士前期課程)

### 「東アジアの平和と安全保障」(担当：李鐘元教授)

昨今様々な局面で議論されている「東アジア共同体」。しかしそれが国民的なレベルでの議論になっているとはいえないし、そもそもどのような機構を目指しているのかさえ不明瞭なのが現状ではないでしょうか。またそのアクターである日本・韓国・中国・ASEAN諸国、そしてアメリカなどが、それぞれ抱いている思惑はけっして一枚岩ではなく、複雑に交差し、絡み合って議論が形成されつつも、未だ何らかの「共同体」を創り上げる局面には至っていません。EUと比較して何が足りないのか、何が違うのか、何が強みなのか。「アジア」とは何か?という根源的な問いに、我々はどう答えていくべきなのでしょうか。

国際政治学分野が理論的土台になりつつも、「外様」である他研究科の院生が加わることで、さまざまな分野からの議論がぶつかり合う「東アジア共同体」さながらのまとまりのなさ(笑)もまた平和・コミュニティ研究機構の魅力を体現しているのではないのでしょうか。はじめは緊張に包まれていた教室も、気がつけば不思議な結束が生まれているものです。まさにアジアン・テイスト?



(岡恭介、立教大学文学研究科博士前期課程)